



瓦礫の聖母

小林正資

人物

- 岡田巖 (18) (87) (元) 日本軍人
- 岡田咲 (15) (84) その妻
- グラハム (21) (89) イギリス人捕虜
- 桂 (44) 捕虜収容所所長
- 末永 (28) 岡田の上司・日本軍人
- 川村 (33) 軍曹
- 佐藤 (28) 軍曹
- 山村 (57) 三菱社員
- シマンジュンタック・松吉 (20) インドネシア人捕虜
- バステン (22) 黒人捕虜
- ニールセン (25) オランダ人捕虜・通訳
- ヤン (21) 咲の恋人・ニールセンの弟
- ワラント (22) オランダ人捕虜
- 米田 (43) 軍属
- 貝原 (55) 軍属
- ジエームス (24) 捕虜
- ケビン (23) 捕虜
- エマ (24)
- 原田 (27) 軍医
- スウィーニー (25) アメリカ兵
- オルガンをひく日本人女性 (25)
- 日本人神父 (60)
- 野中 (55) パン製造業者
- 老人 (68)

他

○長崎市・夏

長崎市の俯瞰。

街中。車道。その中の政党街宣カー。

街宣カー「数々の過ちを犯し、世界の国々に対し多大な傷跡を残した先の戦争を反省することなくしては、昨今の近隣諸国との軋轢も根源的には解決できません。この被爆の街、長崎で、平和の尊さをかみしめ、平和憲法を守り、二度とあのような戦争を繰り返さないためにも・・・」

街宣カーの演説は続く。

街角。古びた小さな住宅街。

その一角にある「岡田金物」の店。

○岡田家・中

薄くらい部屋。

岡田咲（84）が老眼鏡をかけ、ワープロを英語で打っている。

咲は十字架のネックレスをしている。

その傍らで、手紙を書いている岡田巖（87）。

ケロイドの手。

車椅子の岡田。

蝉の声。印刷音。

椅子の背もたれに体を預け、ふーっと息を吐く岡田。

印刷された英文の手紙を順番に並び替え、まとめる咲。

岡田「読んで、くれないか」

咲が老眼鏡をはずし、印刷された紙に顔を近づけつつ英語で音読をはじめ。

その声を目を閉じて聞いている岡田。

咲の声、続き、

○飛ぶ飛行機

○同・中・客室

多くの外国人、日本人が乗った客室。

客室乗務員がジュースのサービスをしている。

眼鏡をかけているグラハム（88）が英語タイプの手紙を読んでいる。咲の英語の声が岡田巖の日本語の声に変わっていく。

岡田の声「私の親愛なる懐かしき人よ。遠い過去の記憶をたどりつつ、貴殿にお便り申し上げる事が出来たのは私の最も喜びとするところです。今、その遠い過去の出来事を思い出し、私の胸はいっぱいになりました。貴殿と親交しておられる山村氏から貴殿の御消息をうけたまわった時、私はその偶然に息も止まるほど驚きました。60年もの空白を思い、我ながら呆然といたしております」

客室乗務員がグラハムにジュースのサービスを促すが、グラハムは手で穏やかに制止し、窓の外を見る。

グラハムの隣の席にはエマ（24）が座っている。

エマは窓の外を見ている。

エマ「（英語）日本が見えて来たよ。おじいちゃん」

海と陸がかすかに見える。

眼鏡をとり、老いた目でそれを凝視するグラハム。

岡田の声「あれは1943年1月の事でした。私は門司港まで貴殿らを迎えに行きました。冬だというのに、貴殿らは半袖のシャツと半ズボンでした。輸送の列車では、貴殿らは皆持ってきた毛布を肩からかぶっていました。寒そうにしている貴殿らを見ないように、私は窓の外ばかり見ていました」

グラハムの視線、窓の外に見える陸にズームしていく。

映像、モノクロになる。

○門司駅構内（モノクロ）※以下回想シーンはすべてモノクロ。

1943年・昭和18年1月の字幕。

停まっている汽車。日の丸がはためている。

日本兵が押し込むように多くの捕虜達を列車に乗り込ませている。

一般の日本人が、捕虜を不思議そうに見ている。

一般人女「外人さんがいっぱいおるねえ」

一般人男「インドネシアの戦線で捕らえられたんやと。どこへ連れて行かれるんやろうね」

汽車の車両に「第十四分所」の張り紙がある。  
岡田巖（20）が捕虜達を汽車に乗せている。  
西洋人、インドネシア人（当時はオランダ人）が寒そうに岡田に捕虜カードを見せ、  
汽車に乗り込んでいる。  
岡田は、真新しい軍服を着ている。

○煙をはき、走る汽車

○汽車・客室内

車両の端に日本兵が床に腰を下ろし、腕組みをしている。  
窮屈そうに、そして寒そうに頭から毛布をかぶり座席に座っている捕虜達。  
岡田は捕虜達と同じように座席に座って窓の外ばかり見ていた。岡田の向か  
いの席にグラハム（21）があせったような顔を岡田に向けて、

グラハム「（英語） 便所はどこですか？」

岡田「（意味わからず） な、なんですか？」

ぎよつとしてグラハムを見る岡田。

グラハム、股間を押さえ、

グラハム「（日本語） べ、べんじょ」

岡田「便所？」

岡田は立ち上がり、便所のある車両へとグラハムを連れて行こうとすると、  
それを見て何人かの捕虜が堰を切ったようにその後をついてきた。

○長崎駅

汽車が停まっている。

○長崎駅前広場

400名ほどの捕虜が整列している。  
約7割がインドネシア系オランダ人、その他が西洋人、わずかに黒人の姿が見える。  
川村（33）（軍曹）が銃剣を振りかざし、

川村「さっさと整列せんかあ！」

他に幾人かの日本兵がいる。もたもたしている捕虜を、日本兵がびんたしている。捕虜達はおどおどと恐れながら日本兵の言われたとおりにしている。寒そうにしている捕虜達。

川村「これより、桂中尉俘虜収容所第14分所長からおまえらに対し、注意を与える」

桂（44）に敬礼する川村。

桂「私が所長の桂であります。各人それぞれ所員の指示に厳格に従い、規律ある行動をとって頂きたい」

桂が静かに、穏やかに言った。

ニールセン（25）がその言葉を大声でオランダ語に通訳している。グラハムが岡田と目が合い、黙礼した。岡田はどぎまぎしたように目をそらした。

○長崎俘虜収容所・第14分所

門の横にそう書かれた立て札。  
警備の日本兵が二人銃剣を持ち立っている。

○同・門の中・赤煉瓦、二階建ての収容所

赤煉瓦のすすけた壁。

○同・中

捕虜達が衛兵（日本兵）に指示されながら、それぞれ二階建てのベットに荷物を置いてる。ざわざわとした雰囲気。  
力無く、ぐったりした表情でベットに座る捕虜の姿。

○同・本居室

木造二階建ての小さな別棟。

○同・中

所員が10人ほどいる。それぞれの部署を桂が通達している。

桂「炊事、經理班の班長は末永伍長。岡田上等兵は同班付き」

岡田「は」

末永（28）が岡田を見る。

末永「よろしく」

岡田「は」

敬礼する岡田。

桂が次々に辞令を出していく。

○赤煉瓦の収容所・中

わあわあどざわめく捕虜達。

それらを横目に、リュックを担いだ岡田が通っていく。

じっと岡田を見るオランダ人捕虜。

視線を感じ、なんとなくそそくさと歩く岡田。

○同、岡田の部屋・中

部屋の中まで捕虜のざわめき、聞こえている。

岡田が敬礼している。

末永が椅子に腰掛けている。

六畳ほどの部屋。

岡田「改めて、よろしくお願い致します」

末永「まあ、気楽に行こうや部屋ん中では」

なおも敬礼している岡田。

末永「大学出やて？、おらあ小学校しかでとらん」

岡田「は」

立ち上がり、岡田の側に来る末永。右足を引きずっている。

末永「・・・敬礼せんでよかよ」

笑う末永。

敬礼をやめる岡田。

末永「荷物ば置いて、楽にし」  
岡田「恐縮であります」

荷物を置く岡田。

末永「出身はどこね？」

岡田「静岡であります」

末永「静岡。富士山があるところやね」

岡田「そうであります」

末永「そのありますってのもやめにせんね。それは元々長州の方言やっど。陸軍が長州  
閩で占められよってから、それが軍隊語になりよった。俺はあんまり好きやなか」

岡田「ははあ」

末永「俺は薩摩出身じゃ。かごんま」

岡田「かごんま」

末永「鹿兒嶋のことじゃ」

末永、又によつと笑う。

やつと緊張がとけたように岡田も笑った。

ノックの音。

ニールセンの声「失礼致します」

末永「ん？、開いとるぞ」

ドアを開けて、ニールセン、インドネシア系オランダ人のシマンジュンタツ  
ク(20)、オランダ黒人のバステン(22)が入ってくる。皆、敬礼している。

ニールセン「炊事、経理班付きのものです。ご挨拶に伺いました・・・こちらがシマン  
ジュンタツク、こちらがバステンであります」

末永、笑顔で彼らに近づき、

末永「私が班長の末永です。こちらが岡田上等兵」  
岡田「よろしく」

岡田、黒人のバステンを怪訝そうにみる。  
バステンは無表情に敬礼している。

末永「えっと、こっちの黒いのがバステんで、こっちが・・・シマン・・・なんじゃったかの？」

ニールセン「シマンジュンタックであります」

末永「名前がながかね。うーん・・・松吉。俺の甥っ子の正吉に少し似とるからおまんさの名前は松吉じゃ。正月やしええ名前やろ」

シマンジュンタック「マツ、キチ」

末永「そうじゃ。おまんさの名前は松吉」

末永、松吉に微笑む。

人なつっこい笑顔をみせる松吉。

末永「まあ、お互い立場も違うが、仲良くやって行こう」

岡田が末永の優しい顔をみる。

何となく自分のこわばった顔をなでる岡田。

○收容所の広場（朝）

朝のラッパを吹く衛兵。

○同・捕虜の部屋・中

衛兵が笛をならしながら歩いている。

衛兵「起床！」

すばやく、起きてくる捕虜達。

皆小走りに部屋を出て行く。

○同、洗面所

捕虜達が一斉に洗面所で顔を洗っている。敏速な行動である。

○同、食堂・中

大きな食堂で大勢の捕虜達が朝食をセルフでとっている。

○同・厨房

割烹着姿の岡田らが懸命に働いている。

○同・食堂・中

がやがやと席に着き朝食をとっている捕虜達。英語、オランダ語が飛び交っている。メニューは鰯の干物とみそ汁、たくあん、麦飯。

○同・厨房

岡田達が一服している。

疲れた様子の岡田、末永。

バステン、松吉は米田（43）、貝原（55）の指示に従ってなおも働いている。

末永、岡田が捕虜達を見ながら、

末永「連中、すごい食いつぶりやな」

岡田「体、大きいですから、全然足りなくてしょうね」

末永「しかし、西洋人っちゃうのは皆同じ顔のごとあるな」

岡田「何だか彼らの目って怖いですね。みんなトカゲの目みたいだ」

懸命に食べている捕虜達。

末永「お前、西洋人見るの初めてか」

岡田「はい。こっちに来て、初めてです」

末永「嫌いか」

岡田「わかりません」

末永「ふーん、俺は南京で毎日みとった。そのうちなれよる」

岡田「南京に西洋人がいるんですか？」

末永「当たり前じゃろう。おまえそげんこともしらんとか」

岡田「すいません」

末永「支那には西洋人が都市に行けばうじゃうじゃいるったい。大きな家ば建てよって、のうのと住んでおると。支那人はかわいいそうったい。自分らは豚小屋のごとある家で貧乏しとった」

岡田「・・・」

末永「さ、掃除ばはじめるか」

岡田「はい」

末永と岡田が掃除をはじめめる。

米田が末永にむかい、

米田「晩飯の買い出しはいつ行けばいいんかの？」

末永「九時になったら、バステンと松吉ばつれて行って下さい。あ、岡田も行け。米田さんに色々教えてもらおうとよか」

岡田「私も、ですか？」

末永「なん？いやか？」

岡田「いえ」

米田「ほう、捕虜ば連れて出てもよかね？」

末永「よかです。彼らは逃げるところもなかとですから」

○収容所・広場

捕虜達が人種別に整列している。

佐藤（28）（軍曹）が遅れてきたオランダ人捕虜に、

佐藤「貴様！！」

捕虜、びんたされる。倒れるオランダ人捕虜。

川村が捕虜達に向い、

川村「いいかあ、時間は絶対厳守だぞ。1秒でも遅れてはならん！」

川村の横のニールセンがオランダ語に川村の言葉を訳す。

緊張が走る捕虜達。

○長崎の街中

捕虜達が三列縦隊になり、整然と歩いている。道行く日本人が足を止めて捕虜達を見ている。

○三菱長崎造船所

巨大なドックに軍艦がとまっている。

○同・中

多くの捕虜達が、重い鉄鋼を運んだりしている。  
監視兵が捕虜を監視している。

○同・一般作業所

捕虜の作業所と金網で仕切られた場所。一般の工員、徴用された女学生などが作業をしている。その女学生の中に咲（15）が汗を拭きつつ、ネジを検品している。捕虜達を見る咲。

監視兵の罵声が飛んでいる。

監視兵が捕虜の一人をびんたしている。

その音に、首をすくめる咲。

捕虜達は無表情に作業をしている。

ヤン（21）とふと目が合う咲。

ヤンは無表情に咲を見た。

咲はすぐに目をそらした。

○長崎の街中

海沿いの道で大八車を押すバステンと

松吉。米田と貝原、ニールセンもいる。

道行く人が珍しそうにバステンや松吉を見ている。子供達がよってきて、

子供1「外人さんじゃ」

子供2「俺初めて見たと」

岡田「あっち行きなさい」

海辺で釣りをしていた老人（68）が魚籠を手に岡田らに近づき、

老人「魚ば分けてやるばい」

岡田「い、いいです」

貝原が魚籠をのぞき込む。

貝原「おお、たいがいると」

老人「魚籠ごと持っていくとよか」

バステンと松吉がひく大八車に魚籠を置いて立ち去る老人。松吉が喜ぶ。

岡田「いいっていったのに」

ニールセン「友好的ですね、町の人。ありがたいであります」  
岡田「めずらしいんだよ、君たちが」

松吉がニールセンに小声で何か言っている。ニールセン、少し考え込み、それから岡田に向かい、

ニールセン「あの、質問して良いですか」

岡田「何、ですか」

ニールセン「あの、岡田上等兵殿もびんたをするのですか、と彼が聞いてます」

岡田「びんた？」

松吉が不安そうに岡田を見ている。

岡田「・・・人を殴るの、苦手なんだ。もめ事も出来るだけ避けたいし。そんな事言ったら戦争出来ないんだけど」

ニールセンが松吉に岡田の言葉をオランダ語に訳す。

松吉の顔が人なつっこい笑顔にかわる。

ニールセン「・・・つかぬ事ですが、岡田上等兵殿は大学生ではないですか」

岡田「いや、学徒動員で、繰り上げて卒業したんだ」

ニールセン「そうですか」

岡田「君は、えつとニ、ニール」

ニールセン「ニールセン、いいいます」

岡田「ニールセンは工場、行かなくてもいいの？」

ニールセン「私は日本語が出来るのと、本国では佐官でしたので」

岡田「佐官？」

ニールセン「中佐、でした」

岡田「中佐なんだ」

驚いたようにニールセンを見る岡田。

ニールセン「捕虜になれば関係無いですけど」

岡田「・・・日本語、うまいけど、勉強したんだ」

ニールセン「はい、本国の大学では、日本語を専攻していました。私、日本好きでした。歴

史、興味ありました。長崎、オランダと深い関わり、あります。今私はその長崎にいます」  
岡田「そうなんだ。日本、好きなんだ」

ニールセン「日本は侍の国と聞いてました。インドネシアでの日本兵、とても強いでした」  
岡田「侍の国かあ。私は全然強くないけど」

岡田が苦笑いをする。

ニールセン「でもたくさん仲間、死にました。私の国、インドネシアで日本に負けました。  
たくさん捕虜にされてしまいました」

少し、ニールセンの表情がしずむ。

岡田「結構、遠慮なしにしゃべるね」

ニールセン「申し訳ありません。岡田上等兵殿は、びんたしない、言いました。それでっ  
い」

岡田「いいよ。気軽に色々話してくれて。私も、勉強になるから。でも、その上等兵  
殿っていうのはやめてくれないか」

岡田、ニールセンに微笑する。

一行、出島の付近を通る。

並んでいる旧オランダ商館。

松吉「あ」

松吉がある場所を指さす。そこにはオランダ文字「V O C（オランダ連合東  
インド会社）」が書いてある。

ニールセン「あれは、何ですか？」

岡田「あれは・・・」

米田「旧オランダ商館たい。ここは出島うちゅうとこたい」

ニールセン「出島」

しばし文字に見入るニールセン、松吉、バステン。ニールセンはとでもなつかしそ  
うに文字を見ている。

岡田が彼らをおだやかなまなざしで見つめている。

美しい海。太陽がやや傾いている。

○岡田家の軒先(現代)

岡田が咲の車椅子に押されて出てくる。正装している岡田と咲。一台のタクシーが来る。

山村(57)が降りてきて、岡田と咲に一礼する。

山村「良い天気ですね」

空を見上げる岡田。

晴天。

タクシーに乗り込む岡田達。

手早く運転手が岡田の車椅子をトランクに押し込み車を発進させる。

○タクシーの中

山村が助手席に座り、岡田と咲は後部座席に座っている。

山村「岡田さん、調子は悪くないですか？」

岡田「大丈夫です。すいません」

山村「やっど、会えますね」

岡田「山村さんのおかげです。すいません」

山村「何謝ってるんですか。私こそ感謝しています。岡田さんが私の申し出を快く受けて下さったから、再会が実現出来るんです」

岡田は何となく恐縮している。

山村「確認出来る長崎捕虜収容所の日本人の生存者は、岡田さんだけですから」

下を向いている岡田。

咲「長崎三菱造船所の歴史の編纂をなされてるんですってね」

山村「はい。戦争当時の資料が、あまりのこされていません。今日は私にとっても貴重な日になります」

咲「そう。グラハムさんの事はどげんして知ったのですか」

山村「岡田さんから聞いてないですか？」

咲「この人はそげなこと、あんまりしゃべらんから」

山村「ある時彼が会社宛に手紙を下さったんです。彼も戦後時を経て、当時の事を色々、知りたくなったようです。それで渉外部の私が、彼と手紙のやりとりをはじめたんです」  
咲「そう」

山村「手紙の中で、グラハムさんが当時の収容所の日本人の生存者がいれば是非お会いしたいと言ってきたんです。それで色々調べて、やっと岡田さんにたどり着いたってわけです」

岡田、何となく頭をかいている。

咲が微笑する。

#### ○飛ぶ飛行機

#### ○同・客室

グラハムが目を閉じて座っている。

アナウンス「まもなく当機は長崎国際空港に到着致します・・・」

思いふけるように目を閉じているグラハム。

岡田の声「あの当時、私はまだまだ若く、貴殿ら外国人に対して偏見や、コンプレックスのようなものがありました。なかなかうち解けることが出来ず、苦勞もしました。しかし月日が流れるにつれ、私の偏見はなくなってきました。一人の人間として、貴殿らと接するようになり、楽しい事もたくさんありました。もちろん貴殿らにはつらい思いをさせてしまったと、ずっと思っています。一人の当時の日本人として、その事をお詫びしたい気持ちでいっぱいです」

目を閉じているグラハム。

エマ「(英語)きれいな海」

グラハム「ああ。海だけじゃなく、日本は、長崎はとても美しいところだよ」

何かを思い出すように目を閉じているグラハム。

#### ○収容所

広場の梅がほころんでいる。

○同・食糧倉庫・中

棚に野菜、米、小麦等が大量に置かれてある。

バステンが米の袋などを数えている。

バステン「コメナナ、ミソジュウ・・・」

岡田がその数を帳面に書き込んでいる。事務的な作業が続く。

岡田「一服しようか」

バステン、無言で地べたに座る。

岡田「・・・バステンは、仲のいいやついるの？（オランダ語で）友達、いるの？」

ふと岡田が聞いた。

バステン「・・・」

バステンは何も言わず目を伏せる。

岡田「・・・」

ため息をつく岡田。何となく手持ちぶたさになる岡田。

バステン「・・・（日本語）教会」

岡田「教会？、なんだよ、突然」

バステン「長崎、立派な教会ある。浦上天主堂。みな知ってる」

岡田「浦上天主堂」

バステン「そこ行きたい。長崎、キリスト、昔からいる」

岡田「教会にはキリストがいるんだ」

バステン「私、神様の前だけ、楽になれる」

バステンをじっと見る岡田。

岡田「わかった。桂所長に相談してみるよ」

バステン、ほんの少し、喜びの表情を見せる。

岡田「笑った顔初めて見たよ」

岡田はうれしそうに笑う。

○同・本部室(夜)

桂、岡田、末永、川村、佐藤がいる。

末永「私は良いんじゃないかと思えます。我が国は信教の自由を認めています」

末永が桂に言った。

佐藤「捕虜にそのような計らいなど必要ないでしょう」

川村「戦時下だぞ、何を甘つちよろいこといってんだ。奴らが団結して、反乱でもおこしたらどうするんだ」

川村が末永をにらみ言った。

桂は黙ったままである。

岡田「あの、反乱は、起こさないとします。ここは日本ですし、反乱を起こしたところ、どうなるものでもない」と

佐藤が岡田の前に来る。

佐藤「てめえ、何偉そうにいつてんだ。学生上がりの青二才が、生意気にももの言ってるじゃねえよ」

佐藤、岡田の襟首を掴む。

岡田「・・・すみません」

桂「よさんか」

佐藤、岡田を放す。

桂「わかった。とりあえず、保留にしておく。後日、私が判断する。それでいいな」

佐藤は岡田をにらみつけている。

○同・捕虜のいる部屋（夜）

静かである。小さな電灯がついている。ほとんどの捕虜がベットに横になっている。わずかにチェスをうっている、老いた捕虜の姿がある。

○同・岡田と末永の部屋・中（夜）

岡田と末永が畳に座り焼酎を飲んでいる。岡田は苦そうに飲んでいる。

末永「まだ、なれんか」

末永、岡田の茶碗に焼酎をつぐ。

岡田「はい。あ、いえそんなことないです」

末永の酌を両手で受けている岡田。

末永「九州人は皆焼酎ば飲む。特に薩摩隼人は焼酎をお茶のごとく飲んよ」

少し、酔った感じの末永。

末永「ところでおまえはどう思うんじや。教会の件は」

岡田「わかりません」

末永「おまえが言いだしよったんやろうが」

岡田「・・・捕虜だとか、そういう立場を抜きにすれば」

末永「抜きにすれば？」

岡田「うまく言えませんが、遠い異国の地で、彼らは不安な日々を過ごしていると思うんです。そう、考えると」

末永、笑って、

末永「岡田はあまチャンばい。そんなこついつとつたら、戦争なんかできん」

岡田「そう、ですよね。だからやっぱり、わかりません」  
末永「まあよかよか。さ、飲め飲め」

えきへきした顔でありがたく末永の酌を受ける岡田。

末永「岡田上等兵殿はあまちゃんばい」

酔っておどける末永。

ふと、バイオリンの音が聞こえてくる。

末永「何の音や」

岡田「・・・」

岡田と末永は顔を見合わせた。

○同・捕虜のいる部屋

ヤンがバイオリンを弾いている。

傍らでワラント（22）がバイオリンに合わせ、ギターを弾いている。

ニールセンもいる。

少し離れたところにバステンもいる。

静かな美しい音色。

岡田と末永が来る。

ニールセン、立ち上がり、

ニールセン「すいません、夜に音楽など。（オランダ語）ヤン、やめるんだ」

末永「いい。やめんでいい」

岡田「いい音だ」

末永「なんていう曲だ」

ニールセン「シューベルトであります」

岡田「シューベルト」

ニールセン「ヤンは本国では音楽大学生であります。私の弟であります。ギターを弾いているワラントも音楽大学生であります」

末永「あります、あります、か。しかし、なんして突然バイオリンなんて弾きおるんじや」

ニールセン「すいません」

末永「理由ばきいとる」

岡田「怒ってるんじゃないから、教えてよ」  
ニールセン「・・・我々は、わずかでも、癒しの時が欲しいのです」

ニールセンの言葉に岡田と末永、黙り込む。流れる、バイオリンとギターの音。静かである。

ドン、とドアの開く音。川村がいる。

川村「何をしとるんだ」

ヤンとワラント、ひくのをやめる。

川村、ヤンとワラントのそばにやってきていきなり二人を殴る。

岡田、それに割ってはいる。

岡田「やめてください」

川村「なんじゃおまえは！、何故こいつらをかばう」

岡田「彼らは、少しでも癒しが欲しいのです」

川村「捕虜に何が癒しじゃ」

川村、岡田に殴りかかる。

それを末永がとめる。

ふと、拍手がなる。

桂が拍手しながら来る。

ニールセン、気をつけの姿勢になる。

桂「シューベルトのバイオリン協奏曲だな。久しぶりに聞いた」

川村「所長、こいつらは夜中に音楽など」

桂、川村の肩を優しくたたたく。

桂「今日は特別に許可する。演奏、続けてくれ」

川村「な」

ヤン、バイオリンを再び奏でる。ワラントも続く。

末永「所長は、ご存じなんですか？、シューベルト」

桂は微笑している。

ニールセンの側に桂来て、

桂「……教会、来月の日曜から定期的に、礼拝を許可する」

一瞬しんとする。

ニールセン、桂の言葉を大きな声でオランダ語で訳す。

寝ていた捕虜達が起きあがり歓声が上がる。

ワラントが陽気にギターを弾き、それにヤンのバイオリンも続く。

笑顔になっている末永。

岡田は啞然としている。

岡田「すごい喜んでる」

音楽に、陽気に手拍子する捕虜達。

バステンが岡田の方を見て笑っている。岡田も微笑する。

桂が無然とする川村の肩に手を乗せている。

○長崎三菱造船所内（日替わり）

捕虜達が隊列をなして重い荷物を運んでいる。

ヤンもワラントも、グラハムも懸命に運んでいる。それをきびしい顔で監視してい

る佐藤。小柄なオランダ人捕虜が荷物を運ぶ途中、よろけ、荷物をぶちまけてしま

う。

佐藤「！」

佐藤が飛んできて、その捕虜をビンタする。倒れる捕虜。

ヤンがその捕虜をかばおうとする。

佐藤「何だ貴様！」

ヤン、佐藤をにらみつける。

佐藤「貴様、反抗する気か」

佐藤はヤンを蹴り飛ばした。

他の捕虜達は素知らぬ顔をしているが険しい表情になっている。

佐藤「お前は罰として昼飯は抜きだ！」

ヤンを見下ろし、佐藤が言った。

その様子を見ている咲。

○同・食堂内

多くの捕虜達が疲れた顔で食事をしている。

ケビン（23）、ジェームス（24）が小声で話をしている。

彼らの横の席に、グラハムがいる。

ケビン「（英語）あのくそ野郎、俺たちをやたら殴りやがる」

ジェームス「（英語）この借りは必ず返してやるさ」

ケビン「（英語）サル野郎どもめ」

ケビンがみそ汁のわんを逆さにして飲み干す。

グラハムがその言葉を聞いている。

○同・敷地内の空き地

フェンスにもたれかかるようにヤンが座っている。

ヤン「・・・」

遠く、海を見つめるヤン。

ふと人の気配がして振り返るヤン。

フェンス越しに咲が立っている。

ヤン「・・・」

咲「あ・・・」

ヤンはじつと咲をみる。

咲、持った風呂敷からごそごそとなにやら取り出す。

おにぎりを無言で差し出す咲。

ヤン、おにぎりを見つめ、咲をみる。  
咲、じっとヤンを見ている。

ヤン、おにぎりを手に取ると食べるように食べる。  
もう一つおにぎりをヤンに差し出す。

咲、ヤンに笑いかける。

ヤン「アリガトウ」

ヤンも咲に笑いかける。

美しい海がそこに見える。

○収容所内・本部室・中

桂と岡田、いる。岡田は直立不動。

桂「楽にしろ・・・例の教会の件だが」

岡田「はい」

桂「市内の合唱団の子供たちに歌を歌わせたいんだ」

岡田「歌・・・？」

桂「教会で捕虜たちを子供たちの歌で歓迎してはどうか、と思うんだ」

岡田「それは、すばらしいことだと思います」

桂「その手配をしてくれないか」

岡田「はい。すぐに」

桂、うなづく。

部屋を出ようとする岡田。

岡田「・・・でも佐藤軍曹たちは、反対されるんじゃないでしょうか」

桂「彼らには軍の宣伝用にするといっている」

岡田「(間) 所長は、やさしいですね」

桂「・・・行きなさい」

岡田「はい」

窓の外を見る桂。桂を見ている岡田。

○同・捕虜の部屋・中(夜)

にぎやかな感じ。以前より少し明るい感じの捕虜たち。

○同・廊下

風呂上がりの岡田とバステンが歩いている。

バステン「教会、岡田上等兵のおかげ」

岡田「私は何もしてないよ。桂所長のおかげだよ」

バステン、岡田を見て微笑する。

岡田「それより今日こそ、負けないからな」

岡田が卓球の素振りをしながらおどけたようにバステンに言う。

○同・娯楽室

ケビンとジェームスが卓球をしている岡田とバステンが入ってくる。

ケビンとジェームス、バステンを見て不快そうに卓球をやめ出ていく。

不思議そうな岡田の顔。

バステンは目を伏せている。

岡田「ようし、勝負だ」

かまわず岡田、空いた卓球台で卓球を始める。

明らかにバステンの方が強い。

岡田、懸命に打ち込むが、あっさりバステンに返される。

悔しそうな岡田。

岡田がそれでもスマッシュを打ち込んだ。バステン、それを返そうとせず呆然としている。

岡田「やった」

転々とする玉。

岡田「・・・」

バステン「・・・黒人、どこにいても嫌われる」

岡田「バステン」

バステン「(オランダ語) 日本は黒人差別しない国と聞いているが、本当なのか」

岡田「(オランダ語) 差別？」

バステン、じつと岡田を見ている。

バステン「教会で聞いた。日本、黒人差別しない国と」

岡田「・・・昔国際連盟で出した人種差別撤廃案の事言ってるのかな」

岡田がつぶやいているがバステンには

意味がわからない。

バステン「黒人、何故いけないのか」

岡田「・・・いけないよ。日本人は外人自体、あまり見たことがないから驚くかもしれないけど・・・私もそうだったけど、でも肌の色で差別なんかしない」

バステン、沈んだ表情。岡田の言葉の意味もわからない様子である。

バステン「(オランダ語) 私は一体何と戦っているのか。教えてくれるものは誰もいない」

岡田「なんて言っているの？」

バステン、岡田を見つめる。

玉を拾う岡田。

岡田「それに時代は変わるさ。戦争だつていつか終わる。それまで、誰に恥じることのない生き方をしていれば良いじゃないか」

明るく言う岡田。

バステン「(微笑し) わかりません、上等兵殿の日本語」

岡田「上等兵殿はやめてくれよ」

玉をうつ岡田。

それを打ち返すバステン。

岡田、空振りする。

岡田「くそっ」

バステン、やや寂しげに微笑する。

○長崎市街（日替わり）

50人ほどの捕虜達が三列縦隊になって歩いている。

道行く日本人が珍しそうに捕虜の行進を足を止めてみている。

バステン、ニールセン、ヤン、ワラント、グラハム、岡田の姿が見える。

川村と佐藤が無然とした表情で歩いている。

ケビンとジェームスが小声で話している。

ケビン「(英語) それにしても日本人は皆同じ顔してやがる」

道行く日本人を見てケビンが言った。

ジェームス「(英語) 猿だからな、見分けはつかん」

行進する捕虜達。

○浦上天主堂・外観

立派な石造の建物。

○同・中・礼拝堂

窓にステンドグラスが張られている。

聖母マリア像。

捕虜達が入ってくる。

オルガンをひく日本人女性（25）。

一斉に子供達の合唱が始まる。曲は「アベ・マリア」。

一様に驚きの表情を見せる捕虜達。

岡田、微笑してそれを見ている。

8ミリカメラを回す軍人。

川村と佐藤が無表情で見ている。

厳粛な表情になるバステン、ヤン、ニールセン。ワラントは感激して泣いている。

グラハム「・・・エンジェル」

無垢な子供たち。

捕虜達も、歌を歌い始める。

日本人神父（60）が岡田を見て微笑する。岡田も微笑し、黙礼する。歌が終わる。

神父がキリスト像の前に立ち、

神父「主よ今あるすべての混乱と暴力の世界から人々を救い賜え。アーメン」  
全員「アーメン」

皆目を閉じて祈りを捧げる。

川村と佐藤だけが懺然としている。

岡田も目を閉じて祈りを捧げている。

ステンドグラスに照らし出されるキリスト像。

#### ○長崎市街

昭和19年（1944年）2月の字幕。雪がちらついている。街道を行く人々が凍えるように歩いている。

軍艦マーチをけたたましく流し、軍用トラックが走っている。

#### ○収容所

梅の木は裸の枝をさらしている。

#### ○同・医務室

その立て札。

#### ○同・中

床に多くの捕虜が粗末な毛布をかぶって横たわり、うめいているものもいる。

岡田と白衣の原田（27）が話している。

原田「多くのもんが肺炎になつとります。日本の気候に彼らにはついてゆけんのでしよう」  
岡田「今年の冬は特に寒いからな。去年はこんな事なかったのに」

うめき声。

オランダ人捕虜「(オランダ語) お母さん」

岡田はその様子を険しい顔で見ている。

原田「出来るだけ栄養のあるもんくわさんと、死人が増えるばかりです」

岡田「栄養のあるものって言っても・・・」

ふと横たわっている捕虜の中からワラントを見つける岡田。

ワラントに駆け寄る岡田。

岡田「ワラント、大丈夫か」

ワラント「岡田上等兵殿」

岡田を見て微笑するワラント。そして苦しそうな表情になる。

岡田「・・・」

ワラント「(オランダ語) 恋人が故郷にいる。婚約していた。このまま、死ねない」

岡田「結婚の約束、してるんだな」

ワラントはうなずき、写真を岡田に見せた。

美しい女性とワラントが写っている。

写真を見る岡田。

岡田「綺麗な人だ」

その言葉に何とか微笑するワラント。

写真を見て険しい顔の岡田。

○同・食糧倉庫内

岡田と末永がカロリー表をチェックしている。

松吉が食料だなの奥からはい出てくる。

松吉「カボチャ、もうないです。サツマイモ、あります」

末永「カロリーの高い食料なんて日に日に手にはいらんようになりおる」

サツマイモを手にしながら末永が言った。

岡田「パン、食べさせたらどうでしょうか」

末永「パン？、パンなんてどげんして手にいれっど？」

岡田「小麦粉ならいくらかは陸軍から調達出来るはずですよ。それを使って町のパン業者に作らせれば何とかなるんじゃないでしょうか」

末永「しかしパンば食べさせてもしょうがないんやなかか」

岡田「彼らは本国ではパンを食べていたはずですよ。少しは元気がでるんじゃないでしょうか」

末永「うーん。桂所長に相談してみるか」

岡田「はい。ありがとうございます」

喜ぶ岡田。

末永「なんやうれしそうやね。捕虜にくわすんやっど。お前が食うわけやなか」

岡田「なんか、苦しんでる連中見てたら、何かしてやりたくて」

末永「あまちゃんやの、お前は」

言いつつ、末永笑っている。

松吉もよくわからないが笑顔になっている。

○同・医務室・中

ワラントが苦しそうに震えている。

側で死んだ捕虜の遺体が運ばれている。歯をがちならし苦しんでいるワラント。恋人の写真を見つめている。

○同・本部室

その札。

○同・中

桂と佐藤がいる。

佐藤「いちいち捕虜の死体を葬式屋に出してたら、金がかかってしょうがないですよ。かかるべき場所に穴でもほって、埋めたらどうですか」

桂「そんな事はできんよ」

佐藤「だいたいなんであいつらはばたばた死にやがるんだ」

桂「・・・」

末永の声「失礼します」

末永と岡田、入ってくる。

桂「どうした」

末永「は。お願いしたいことがございまして。岡田君」

岡田「は。昨今、捕虜の病死が相次いでおりますが、多分に栄養の不足と、環境への不適応が原因と考えられます。そこで炊事班としまして、彼らにパンを食べさせてはどうかと思い、その旨ご了承頂きたくお伺いに参りました」

桂「パン？」

岡田「は。彼らは本国では毎日パンを食べていたと思います。少しでも慣れたものを食べれば、病人の数も減るのではないかと」

佐藤「何言ってるんだおまえ。なんで奴らにそんな贅沢なもの食わせなきゃなんねえんだ」

佐藤、岡田に顔を近づけ、襟首を掴む。

佐藤「貴様、奴らの味方か」

岡田「・・・」

佐藤「どうなんだよ」

末永「まあまあ。これ以上死なれても困りますから、対策を申し上げています」

佐藤「捕虜なんてのは死んで当然なんだよ。元々戦場で死んでる奴らが恥知らずに生きてるだけなんだ」

岡田「じ、自分は、戦場を知りません」

佐藤「ならば黙っている」

佐藤、岡田をさらにつるし上げる。

末永が佐藤の手を岡田から離す。

佐藤と末永、にらみ合う。

桂「許可しよう」

佐藤「正気ですか」

桂「君だって死人が増え続けたら困るだろう。末永君、直ちに手筈を整えてくれ」

末永「は」

佐藤、岡田と末永をにらみながら部屋を出て行く。  
慄然としている岡田。

末永「乱暴なやつじゃな」

桂「佐藤は実の兄をオランダ兵に殺されている。彼の気持ちもわからなくもない」  
岡田「……」

○同・岡田と末永の部屋・中（夜）

真つ暗な部屋で岡田と末永が寝ている。  
医務室からうめき声が聞こえる。

岡田は何度も寝返りを打っている。

末永「寝むれんのか」

岡田「……彼ら、国に帰りたいでしょうね」

末永「……戦場はこんなもんじゃなかやっただぜ」

岡田「……」

末永「……俺は南京におった。支那の便衣兵がな、一般人のかっこうして突然機関銃で撃つてきよった……仲間がばたばた倒れた……俺の親友はな、脳みそ打ち抜かれて、それがそこらじゅうに飛び散った」

○末永の回想・南京（夜）

街中。

私服で機関銃を撃つ中国国民党兵。

ばたばた倒れる日本兵。

足から血を流した末永が頭を打ち抜かれた日本兵を抱きかかえ、

末永「おい！、おい！」

泣きながら叫ぶ末永。

（回想終わり）

○元の岡田と末永の部屋・中（夜）

岡田と末永。

岡田「……」

末永「……戦争やからな。うらんでもしょうがなか。こつちも、その何倍も支那兵をぶっ殺した。あん時の事は毎日毎日思い出す」

じつと天井を見ている岡田。  
うめき声がかすかに響いている。

○長崎市中・パン製造業者建家（日替わり）

古びれた建家の前でたくさんの小麦粉を軍用トラックからおろしている岡田、バス  
テン、松吉、貝原がいる。  
道行く行人が、

通行人男「捕虜さんはええのう。パンが食えるらしいってよ」

通行人女「その日の米にもうちらは困つとるゆうのに、贅沢なもんじゃ」

嫌みつたらしく言う通行人。

パン製造業者の野中（55）が来る。

野中「普段はサツマイモのあげもんばかりつくつとりますけん、こげんようさんパンば作るのは久しぶりです」

岡田「よろしくお願いします」

汗を拭き拭き、小麦粉の袋を降ろす岡田。

貝原「米田さん、兵隊にとられよつたつてね。あん歳でなあ」

小麦粉をおろしながら貝原が言った。

岡田、無言でバステンらと共に袋をおろしている。

○収容所・入口

棺を担いだ何人かの捕虜と日本兵が出てくる。

その横を大八車を押すバステンと松吉、岡田が通る。

立ち止まり、その様子を見ている岡田達。

松吉「……病気怖い。私、死にたくない」

岡田「大丈夫だよ。パン、食べたなら元気がでるよ」

松吉「私、パン、別に好き、ない」

岡田「松吉はインドネシア人だもんな」

バステン「オランダ人、インドネシアに、ずっと威張ってた」

岡田「……」

松吉「……けど岡田上等兵、私たちにいいことしてくれる」

松吉が少し笑って岡田を見る

。

岡田「……さ、夕食の用意しなきゃ」

再び大八車を押し、収容所の門をくぐる岡田達。

○同・医務室・中

多くの捕虜が苦しんでいる。

ヤンがワラントの側にいる。

以下、オランダ語で。

ワラント「俺はここで死ぬみたいだ」

ヤン「ばかな事言うな。こんなところで死んでどうするんだ。どんな目に遭っても生き延

びて、国へ帰ろうって言ってたじゃないか」

ワラント「そうだな、そうだった」

ヤン「……俺な、好きな子が出来たん」

ワラント「……好きな子たって、ここにオランダの娘はいないぜ」

ワラント、微笑する。

ヤン「……日本の娘だ。工場で見かける子なんだ」

ワラント「……」

ヤン「言葉はわからないけど、心が通じてる気がするんだ。それがたまらなくいいんだ」

ワラント「(うなずく)」

ヤン「国にいる恋人のためにも、絶対死ぬな、ワラント」

ワラント「……わかった」

微笑みあうワラントとヤン。

○収容所・中（日替わり）

軍用トラックが入ってくる。

末永、松吉、バステンがいる。

軍用トラックから岡田と野中が降りてくる。

末永「おお、思ったより多かね」

末永が荷台いっぱいのパンを見ていった。

岡田が笑顔になっている。

皆でパンの積み卸しをはじめめる。

ほかほかのコッペパン。

松吉が喜んでいる。

松吉「おいしそう」

岡田「パン好きじゃないって言ってたじゃないか」

松吉と岡田、笑う。

ニールセンの声「岡田上等兵」

ニールセンが岡田に駆け寄ってくる。

岡田「どうした」

ニールセン「ワラントが、死にました」

岡田「え？」

皆の動き、一瞬とまる。

○同・医務室・中

ワラントの死体。

ヤンが死体の横に座っている。

そこにニールセンと岡田、来る。

ワラントの胸の上に手がくまれ、恋人の写真と十字架が添えられている。

それをじっとみる岡田。

ニールセン「・・・パン、ありがとうございます。岡田上等兵が努力してくれたと聞いてます」

岡田の手にコップ。パンが一個。

それをワラントのくんだ手の横に置く。

ヤン「・・・」

岡田「・・・無駄なのかな。何をやっても」

病気の捕虜の声「オランダ語 くそ日本人共め！、いつか復讐してやる！」

末期の叫びをあげる病気の捕虜。

岡田、いたたまれない顔をしている。

岡田「・・・写真、本国へ持って帰ってやって欲しい。ワラントがずっと恋人に会いたがっていたことも伝えてやってくれ・・・戦争が、終わったら」

ニールセンが無言でうなずき、写真をポケットにしまう。

呆然としているヤン。

○同・収容所内の海の見える場所(夕)

ぼんやり海を見ている岡田。

岡田「・・・」

ふと、バイオリンの音。

ヤンがバイオリンを弾いている。岡田、立ち上がりヤンの方へ歩こうとするがフェンス越しに人影。

咲である。

じっとヤンを見つめる咲。

岡田は立ち止まり、その様子を見ている。

咲とヤンが岡田に気付く。

咲が立ち去ろうとする。

岡田「君」

咲、その声に立ち止まる。

岡田「大丈夫。バイオリン、聞いていいから」  
咲「……」

バイオリンの音が静かに響く。

岡田、咲、ヤンを海に沈む夕日が照らしている。

○長崎国際空港

到着ロビー。たくさんの人。

岡田と咲。

山村が来る。

山村「後、15分ほどで到着するようです」

ケロイドの手をさする岡田。目を細めて、まだ飛行機のない空を見ている。

○飛行機の中

窓の外を見ているグラハム。

雲の切れ間から見える長崎の街。

身を乗り出すグラハム。その体を支えるエマ。

岡田の声「戦局がどんどん悪化していくにつれ、何もかもが悪循環していったように思います。あの戦争において、何が正しく、何が間違っていたのか、現在に至ってもなお、私はわかりません。私は戦場に出ることなく、当時敵であった貴殿らと直接関わりを持ちました。そこには感情が流れ、親愛と憎悪が生まれました。あの戦争の中で、私は特別な場所にいたのかもしれませんが。そう、特別な場所に」

飛行機が着陸態勢に入っていく。

○昭和19年・12月・長崎の街

年の瀬。あわただしく人々が行き交っている。

「ほしがりません勝つまでは」の垂れ幕が建物から下がっている。

○長崎駅構内

多くの子供達が「諫早行き」の列車に乗り、窓から顔を出して手を振っている。その子供の両親達が泣きながら子供を見送っている。集団疎開。

○収容所・門

警備日本兵が一人だけ門の横に立っている。

○収容所・中・食堂（夜）

夕食を食べている捕虜達。以前より人数が半分程度に減っている。サツマイモの混ぜ飯に大根のみそ汁。

お椀に飯を入れる係のものと、飯の量で口論している捕虜がいる。その様子を厨房から見ている岡田と末永。疲れた様子である。

末永「・・・俺たちも飯ばくうか」

のっそりと立ち上がる末永。

○岡田と末永の部屋・中（夜）

岡田と末永、ラジオを聞いている。

ラジオ「我が帝国陸海空軍は各戦場に置いて、大東亜の平和のため米英軍との最後の決戦に挑むべく・・・」

末永がラジオを消した。

末永「いよいよ食料の調達が難しくなってきたな」

岡田「捕虜達が毎日のように食事の量について言い争っています」

末永「・・・勝つしかなか、この戦争に」

末永が険しい顔で言った。

岡田「・・・日本は、勝てるんでしょうか」

沈黙する岡田と末永。

○同・娯楽室・中（夜）

ラジオの周波数の音。

暗い部屋。わずかな明りに質素なクリスマスの飾り付けが見える。

ケビンとジェームスがラジオの周波数を合わせている。

他に幾人かの白人捕虜達がケビンらを取り巻いている。

ラジオ「（英語）東アジア、太平洋における対日戦線では、連合国軍による圧倒的物量

作戦により、ほとんどの戦域において制空権を掌握し、日本本土における空爆作戦も

成功しつつある・・・」

ケビン「（英語）俺たちのこの生活も長くはないな」

ジェームス「ジャップ！」

吐き捨てるように言うジェームス。

○同・娯楽室・中（日替わり）

明るい部屋。クリスマス会が開かれている。

栗やサツマイモといった食料が盛られた皿がある。

50人ほどの捕虜達が整列し、ニールセンの指揮でクリスマスソングを歌っている。

グラハム、ヤン、バステン、ケビン、ジェームスの姿。

桂、岡田、末永、川村、佐藤もいる。

歌が終わる。

桂「今日は貴殿らがこの地に来て二度目のクリスマスであります。わずかながらではありますが食料もありますので、皆日頃の疲れを少しでも慰労して頂きたいです」

日本兵の一人がカメラで写真を撮り始める。

ジェームス「（英語）どうせ、宣伝用にこんな事やってるんだ」

ケビン「（英語）ばかばかしい」

小声で話すケビンとジェームス。

捕虜達が食料の皿に群がろうとした。

川村「ちよっと待て。一つ聞きたいことがある」

足が止まり皆が川村を見る。

川村「昨日、無断でラジオを改造し、英語の放送を聞いていたやつがいるな」

しんとなる捕虜達。

川村「お前とお前、ちよつと来い」

ケビンとジエームスを指さす川村。

佐藤がケビンらの腕を掴む。

ケビンが川村を睨む。

ケビン「(英語) 日本は負ける。お前らはわかっていない」

捕虜達はその発言に固唾をのむ。

佐藤「貴様、抵抗する気か」

佐藤がケビンの胸ぐらを掴む。

桂「よさないか。宴の場だ」

佐藤、ケビンの胸ぐらから手を離す。

桂「本当なのか」

ケビン「・・・イエス」

目を据えて桂を見るケビン。

桂「事情は後で聞こう。今はとにかく、クリスマスを祝おうじゃないか」

皆立ちすくんでいる。

その時、ヤンがバイオリンを手に取り、弾こうとする。

それを末永が制し、

末永「申し訳ないが、今日は日本の曲ば弾いてくれんか」

末永がポケットから楽譜を出す。

末永「弾いてもらう機会ば待ってたんじゃ」

末永、微笑しながら、ヤンに楽譜を渡す。それは「長崎物語」の楽譜。

ヤン、じつと楽譜を見ておもむろに弾きはじめる。

流れる曲。

雰囲気が変わり、皆が食べ物皿に手をつけはじめ。

岡田は川村を見た。川村は険しい顔で捕虜達を見ている。

○同・本部室・中（夜）

桂、ジェームス、ケビン、佐藤、川村、末永、岡田、ニールセンがいる。

桂「君たちは違反だと知ってやったわけだな」

静かに桂が言った。

ケビン「（英語）すでに捕虜達は全員日本がこの戦争に敗れることを知っている」

無表情にケビンが言った。

その言葉を日本語に訳すニールセン。

川村「何だと貴様！」

ケビン「（日本語で）日本政府はうそをついている」

川村「貴様！」

ケビンにつかみかかろうとする川村を末永と岡田が止めた。

桂「・・・そのような発言は控えてもらいたい。今後も繰り返すと、君たちを騒乱罪として処分することになる」

桂が静かに言った。

川村「我が大日本帝国が負けるわけがないのだ！、貴様ら西洋人は土足でアジアの地を蹂躪し、奴隷のような扱ひをしただろうが！、俺たちが鉄槌を下してやるんだよ！」

川村が叫んだ。

ケビンとジェームスは無表情である。

佐藤「通信傍受違反の件はどうなるんですか」

桂「・・・ラジオを取り上げろ」

佐藤「奴らに罰を与えないのですか」

桂「・・・行っっていいぞ」

ニールセン、ケビン、ジェームス、桂に一礼して立ち去る。

川村「お言葉ではありませんが、所長はあまいのではありませんか」

桂「今彼らを刺激して、事態を大きくすることは得策ではない」

川村「所長は我が国が負けれると思っておられるではありませんか」

桂「・・・無礼なことを言うな」

桂、川村を睨む。

川村「だいたいいつまで奴らをのうのと生かしておくのか！、物資食料とも不足して  
る昨今、奴らを生かしておく必要などないではないか」

末永「殺せとでもいうのですかね」

川村「だったらどうなんだ」

末永「無法ではないですか」

末永と川村、にらみ合う。

佐藤「・・・おまえら、それでも日本人か」

佐藤、岡田を睨む。

佐藤「この国賊が」

岡田、佐藤を睨み返す。

岡田「私は国賊なんかじゃない。それに彼らは同じ人間です。投降者に対して、それなりの扱いをしているだけです」

佐藤、岡田に無言で近づき、いきなり殴る。

床に転ぶ岡田。

末永「何をするんだ！」

佐藤「奴らは人間じゃねえんだよ！、敵なんだよ！」

岡田を上から睨む佐藤。

川村「米国など、日本軍の投降者を皆殺しにしている部隊もあるんだぞ。皆殺しにすりゃ

捕虜虐待にはならんからな。俺の友人は、俺の友人は、奴らの火炎放射で焼き殺されたんだ！」

しんとなる一同。

桂「・・・我が大日本帝国は、国際法の信義に基づき、捕虜はあくまでも捕虜として扱  
うのだ。かの国と一緒にするな」

桂が静かに言った。

岡田と佐藤、にらみ合っている。

○同・岡田と末永の部屋・中（夜）

岡田と末永が布団に入っている。

末永「・・・生きて虜囚の辱めを受けるな、か」

岡田「・・・」

末永「痛いかな、殴られたとこ」

岡田「いえ」

岡田、ほほをさする。

岡田「・・・私たちはこの先どうなってしまうんでしょうか」

末永「お前はどげん思うんや」

岡田「わかりません」

末永「わかりません、ばかりじゃな」

岡田「ただ捕虜達は・・・彼らはすでに多くの犠牲者を出しています。ほとんどは病氣など不慮の事とはいえ、捕虜として死んでいった。彼らはきつと、私たち日本人を恨むでしょうね」

末永「俺はかごんま出身やけんのう。薩摩人は降参した敵を大事に扱う伝統がある。俺は奴らに恨まれるようなことは何もしとらん。そげんふうを考えるもんやなか」

○フラッシュ・ワラント

病床のワラント。

ワラント「(オランダ語) 恋人が故郷にいる。婚約していた。このまま、死ねない」

○元の岡田と末永の部屋・中(夜)

岡田と末永。

岡田「・・・誰も死にたくはないんだ。みんな、国のために、懸命に戦っているだけ。正義なんて、どこの国も掲げている。良いとか悪いとか、そんな次元ではないんだと思います」

末永「インテリやのう、おまえは」

末永が笑った。

岡田「・・・」

末永「お前は、典型的な日本人じゃ。まじめで、情けに厚く、それでいて、意外と頑固じゃ。戦場に行けばお前みたいなやつが一番強いんじゃ」

岡田「私は、強くありません」

末永「・・・そして、お前みたいなやつが、お前みたいな日本人が、いっぱい死んだ」

天井を見つめる岡田と末永。

岡田「・・・」

○同・収容所内の海の見える場所

3メートルくらいのフェンスをはさんで、ヤンと咲がいる。

咲とヤンがノートを交換している。

それは日記帳。表紙には1944・2月、とある。

咲、うれしそうにノートを開く。

絵とオランダ語と日本語の文字。

咲「クリスマス、祝ったんや。私もいたかったなあ、その場に。へえ、「長崎物語」、弾いたんだ」

咲が「長崎物語」をハミングする。

ヤン「ウジガミ、ウジコ・・・？」

ヤンが咲の日記を見て言った。

咲「護国神社。お正月、家族でお参りに行くの。氏神っていうのはその土地を守る神様のこと。氏子っていうのはそこに住む人のこと。つまり、私たちの事よ」

その言葉にヤンは自分の胸を指さす。

咲「そう、ヤンのこともお祈りするけん。体をこわさんようにって」

咲にほほえみかけるヤン。それは作業所などでは決して見せない笑顔。

咲も笑った。

#### ○長崎国際空港

到着した飛行機。

到着口からエマに介助されつつ、杖をついたグラハムが来る。

それを迎える山村、咲、岡田。

山村「ようこそ、長崎へ」

グラハムと山村、握手する。

グラハム、咲と抱き合う。

グラハム、しゃがんで車椅子の岡田を抱きしめる。

岡田「よく来て下さいました。よく来て下さいました」  
グラハム「岡田上等兵殿」

グラハム、微笑する。

エマを紹介するグラハム。

山村がその様子を写真におさめている。

到着口でこった返す人ごみの中の岡田と咲、グラハム、山村、エマ。

○昭和20年8月・収容所

けたたましくなる空襲警報。

逃げまどう捕虜達や岡田。

岡田「防空壕に！、早く！」

松吉やバステンが岡田の後に続く。

ニールセンがオランダ語で「防空壕！」と叫んでいる。

○同・防空壕の中

幾人かの捕虜と、岡田、末永がいる。

爆弾の投下される音。

末永「・・・近いの」

松吉が震えている。

末永「何回目じゃこれで」

岡田「三回目です。収容所の近くでも、容赦なく落としていく。どうなってるんだ」

ニールセン「このあたりの工場はすべて軍事工場と見なされているのです。爆弾、落とされます」

岡田「でも戦闘機から屋上の捕虜収容所の目印は見えているはずだ」

ニールセン「・・・アメリカ、容赦しません。味方の犠牲、平気です」

防空壕の外から人が絶叫している声が聞こえる。

岡田が外を覗く。

○同・防空壕の外

川村が叫びながら收容所の屋上から鉄砲を空に向けて撃っている。  
それを見つめる岡田。

岡田「川村さん！」

なおも鉄砲を撃ち続ける川村。

川村「ばかやろー！」

岡田「早く逃げるんだ川村さん！！」

戦闘機、近づいてきて、爆弾を落とし機銃掃射をする。

川村、機銃掃射に撃たれる。

岡田「川村さん！」

爆弾、收容所近くに落ちてくる。

末永が出てきて岡田を間一髪防空壕の中に引きずり入れる。  
落ちた爆弾の爆風で、人が舞い上がっている。

○同・防空壕の中

息が荒い岡田と末永。

ものすごい爆音。

岡田「川村さんが！」

外に出ようとする岡田。

末永「よせ！、お前も死ぬぞ！」

戦闘機の音。

松吉、震えて泣いている。

皆、険しい顔。

○同收容所の中庭

一部壊れた収容所。

瓦礫などを運ぶ捕虜達。

岡田と末永、立ちすくんでいる。

桂が来る。

岡田「川村さんは・・・」

桂「・・・」

険しい顔の桂。

佐藤が作業している捕虜をむやみに殴っている。

末永が止める。

末永「やめんか！」

佐藤「何故止める！、こいつら敵だぞ！、川村軍曹はこいつらの仲間だ！に殺されたんだ！」

岡田も佐藤を止める。

岡田「お願いです、やめて下さい！」

佐藤が岡田につかみかかる。

佐藤「俺たちは戦争をしているんだ。勝つか 負けるかしかねえんだよ！、はなせ！」

佐藤の腰に必死にしがみついている岡田。佐藤は完全に正気を失った顔をしている。

○同・食堂・中（朝・日替わり）

部分的に壁の崩れた食堂で捕虜達が黙々と食事をしている。

メニューはサツマイモ一個と水のようなスープ。

皆、やつれている。

厨房の岡田と末永、バステン、松吉、貝原。

末永「・・・飯のこと、なんも文句いわんようになりおったのう」

岡田「・・・」

岡田、めまいを覚え倒れそうになる。

松吉「岡田上等兵！」

倒れた岡田を抱え上げるバステン。

末永「大丈夫か」

岡田「すいません、ちよつとめまいがただけです」

つらそうな岡田。

末永「ばかたれ。医務室ば行け」

バステンに抱えられ、よろよろ歩き出す岡田。心配そうな松吉。

○同・医務室

何人かの捕虜達が床に寝ている。

けがをしているもの、病気のもの。

岡田も床に寝ている。

白衣の原田、松吉、バステンがいる。

原田「栄養失調です。少し静養が必要です」

岡田「すいません、食事作っているやつが栄養失調なんて」

無理に微笑む岡田。

松吉「病気、よくないです。私、いつでも来ます」

岡田「松吉、ありがとう」

原田と松吉とバステンが去った。

天井を見ている岡田。

やつれた岡田の顔。

グラハムの声「岡田上等兵殿」

岡田、声の方を向く。

隣の床にグラハムが座って岡田を見ている。

岡田「えっと」

グラハム、股間を押さえ、

グラハム「ベンジヨ」

笑うグラハム。

岡田「ああ、あの時の」

グラハム「グラハムと申します。あの時は御世話になりました」

日本語で言うグラハム。

岡田が笑った。

○同・本部室・中

桂が新聞を読んでいる。

「廣嶋に新型爆弾か」の見だし。

桂「……」

窓の外から海を見る桂。

○同・収容所内の海の見える場所（夕）  
海。

フェンス越し、咲とヤンがいる。

じつと海を見ている二人。

咲「……きれい」

ヤン「……戦争、終わる」

咲「……戦争がおわる？勝つの、日本は」

ヤンが無言で首を振る。

ヤン「・・・心配ない。咲は必ず僕が守る」

その言葉に咲、うなだれる。

咲「守るって、どうやって？」

ヤンがフェンス越しに手を差し出す。

ヤン、咲の目を見つめ、

ヤン「必ず、守る・・・愛してます、咲」

小指を差し出すヤン。咲、泣きながらヤンに小指を絡める。

咲「ゆびきりげんまん」

咲がおどけて笑った。

咲、ポケットから何やら出す。

それは、護国神社のお守り。

それをヤンの手に握らす。

咲「これ、持っていて。お守り」

ヤン、首にかけていた十字架のネックレスを咲に渡す。

ヤン「オマモリ」

まぶしそうに見つめ合う二人。

フェンス越しに握られた手。

海。

○同・医務室・中・(夜)

岡田が寝ている。

桂が扉を開けて入ってくる。

岡田「桂所長」

岡田、起きあがろうとする。

桂「いい。寝てろ」

岡田を制し桂、グラハムの方へ行く。

グラハムは座っている。

桂「(英語) 体の具合はどうだね」

グラハム「(英語) もう問題ないようです」

桂「(英語) 広島に新型爆弾が落とされたんだが、何か知っているか」

グラハム「(英語) 推測ですが、アメリカが研究開発していた核爆弾かもしれません。

もしそうなら、とても恐ろしい事が起きたと思います」

桂「・・・核爆弾」

グラハム「(英語) アメリカは、決して容赦しません。特に、人種も違い、宗教も違う

日本人に対しては」

桂「・・・わかった。ありがとう」

グラハム、桂に黙礼する。

その様子を見ている岡田。

岡田「所長は捕虜とそのような話をよくなされるんですか」

桂「英語、わかるのか」

岡田「何となくですが少しは」

桂「彼はイギリス軍の少佐だ。若いが、私より偉い。色んな情報を知っている」

グラハムを見る岡田。

岡田「・・・所長、お聞きしていいですか」

桂「何だ」

岡田、意を決したように、

岡田「・・・日本は、我々は何のために戦争しているのですか」

桂「・・・お前はと思うんだ」

岡田「わかりません。どんどん、わからなくなっていくんです」  
桂「私も、わからないよ」

沈黙。

桂「ただ私は少なくとも、形のないもの、未来の日本人のために戦おうと思っている。私たちが苦しんだ分、尊い平和な時代が訪れると信じている」

岡田「未来の日本人のため・・・」

桂「きつとどこの国のものであれ、思いは同じだと、思っている」

グラハム、じっと聞いている。

岡田「・・・」

桂「早く、よくなれ」

桂、立ち去る。

グラハム「桂所長は優れた軍人です。そして優れた、人間です」

岡田「・・・君はイギリス軍の少佐なんだ」

グラハム「きちくべいえいのえいの方」

岡田「(苦笑い)」

グラハム「・・・戦争、いよいよ終わりが近づいています」

岡田「・・・」

グラハム「残念ながら貴国は敗れるようです」

岡田「・・・わかっているよ。口には出さないけど、みんなそう思っている」

グラハム「負ければ、どうされるのですか」

岡田「・・・わからないよ。私には」

グラハム「わからない、ですか」

岡田「でも、君たちは国に帰れるようになる。それだけはまちがいない」

グラハム「・・・戦争、色々なこと、ありました。戦友、たくさん死んだ」

岡田「・・・」

グラハム「・・・捕虜、つらい。けれど、長崎、とても美しい街。日本の兵隊、皆いばっていたけど、すばらしい人もいた。苦しいけど、忘れない」

岡田はじっと目を閉じている。不意に涙があふれてくる岡田。

グラハムが驚き、優しい目で岡田を見る。  
岡田の慟哭はやまない。

○同・捕虜の部屋・中・(夜)

真っ暗な部屋。

窓際でヤンがバイオリンを弾いている。

バッハのマタイ受難曲第47番「主よ哀れみたまえ」を弾くヤン。  
ヤンの上着には咲からもらったお守りが縫いつけられている。

○咲の家(夜)

窓から空を見ている咲。

星が瞬いている。

ヤンからもらった十字架を握りしめる咲。

○収容所・本部室・中(朝)

昭和20年8月9日の字幕。

日本兵が行き交い、あわただしい。

末永が電話をとっている。

末永「所長、ソ連が、満州国境を越えて突然侵入してきたらしいです」  
桂「ソ連が?・・・」

桂、険しい顔になる。

佐藤が、恐ろしい顔をしている。

佐藤「くそつたれが!」

部屋を出て行く佐藤。

○同・中庭

佐藤が銃剣を振り回し、叫びながら修復作業をしている捕虜達の中を走っている。  
逃げまどう捕虜達。

ケビンとジェームス、いる。

ケビン「(英語) 野郎とうとうくるいやがった」

ジェームス「(英語) 仕返しはたっぷりさせてもらおうな」

佐藤の狂態を見てささやく二人。

○空を飛ぶB29戦闘機

雲の中を飛ぶB29。

○同・中

スウィーニー（25）が操縦している。

無線器を手取るスウィーニー。

スウィーニー「（英語）悪天候のため目的地の変更許可を要請する」

無電「（英語）了解。第2目的地への変更を許可する」

スウィーニー、機体を旋回させる。

○長崎三菱造船所・中

女学生や工員が破壊された建物の修復にあたっている。

捕虜達は一輪車などで瓦礫を撤去している。

咲がヤンを捜しているがいない。

咲「……」

少し心配そうな咲。ポケットから十字架のネックレスをこっそり出して見る咲。

気を取り直したように作業をはじめ咲。

○収容所内・医務室・中

岡田が布団の上に座っている傍らに、松吉とバステンがいる。

グラハムは起きあがり身支度を整えている。ニールセンがグラハムの側にいる。

松吉がかゆの腕を岡田に差し出している。

岡田「食欲、ないんだ」

松吉「食べて下さい。お願いします。食べないと、病気がよくなりません」

さじを岡田に出し食べさせようとする松吉。

岡田「わかったよ。自分で食べるから」

さじをとり、口に運ぶ岡田。

松吉「そう。食べたら大丈夫」

バステンが心配そうに見ている。

岡田「・・・なんだかまるで家にいるみたいだ。バステンと松吉といると敵同士だって事を忘れてしまう」

岡田が苦笑いしながらいった。

バステン「ともだち」

岡田「友達？、友達かあ・・・もし戦争終わっても、友達でいられるかなあ」  
バステン「もちろん」

バステンが言った。岡田は笑顔になっている。松吉も笑っている。  
グラハムとニールセン。

ニールセン「(英語) ソ連が参戦したらしい」

グラハム「(英語) いよいよだな」

ニールセン「(英語) 俺たちは仲間が暴動などを起こさないように努める義務がある」  
グラハム「(英語) わかっている」

岡田、その会話を聞いている。

岡田「体、よくなったんだ」

グラハム「色々、お話出来て良かったです。岡田上等兵殿」

岡田「上等兵殿ってのはやめてくれよ」

穏やかに岡田に一礼し、出て行くグラハムとニールセン。

松吉「それじゃ、私たちも失礼致します」

岡田「ああ。ありがとう」

松吉「早く病氣直って下さい」

岡田「うん」

バステン「良い一日を」

岡田、微笑し、松吉、バステンを見送る。

○同・中庭

ヤンが空を見上げている。真っ青な空。かすかに飛行音聞こえる。

ヤン「……」

胸に貼り付けたお守りにふれ、復旧作業の仕事が始めるヤン。

○同・本部室・中

桂が電話をしている。

桂「……広島が、壊滅？」

窓の向こうの空を見る桂。

○長崎・浦上地区上空

B29戦闘機が飛んでくる。

○同・地上

人々が空を見上げている。

女1「あれは、B29やなかか？」

女2「警報、ならなかったのになんやらねえ」

○上空のB29戦闘機・中

スウィーニーが地上を見ている。

全く無表情のスウィーニー。

ボタンを押す。

ガタ、という音と共に、原爆、投下される。

○収容所・医務室・中

岡田がぼんやり座っている。

かゆの入った腕。

時計を見る岡田。 11時。

岡田「まだ11時じゃないか。松吉のやつ」

岡田、ため息をつき、腕に手を伸ばす

―その時―

すべてがまばゆい閃光に包まれる。

○吹き飛ばされる赤煉瓦の収容所。

○閃光に包まれる長崎三菱造船所

吹き飛ばされる建物。

○閃光に包まれる浦上天主堂

聖母マリア像が建物と共に倒れる。

○長崎市街

道行く人。電車。馬・・・何もかもが閃光に包まれ吹き飛ばされる。

○収容所・医務室

くずれ去った建物の瓦礫。

暗い。ホコリが立ちこめている。

瓦礫の下で気を失っている岡田。

水道管が破裂し、水が噴き出している

水浸しになっている岡田。

岡田「・・・」

気がつく岡田。

右足に痛み。

右足が崩れた瓦礫に挟まって動けない。

必死に瓦礫をよける岡田。何とかはい出てくる。

あたりを見る岡田。呆然としている。  
頭から血を流し、右足を引きずってそれでも歩く岡田。  
何かに躓く岡田。  
見ると顔面がぼろぼろに溶けた松吉の死体。

岡田「！」

松吉をとつさに抱く岡田。  
首がもげる松吉。

事態が飲み込めず、放心したように松吉の胴体を抱いてへたり込む岡田。

○同・中庭

完全に崩れた収容所の建物。  
薄暗いホコリの中、佐藤が銃剣を持ったまま、折れた木の枝に突き刺さり死んでいる。  
ケビン、ジェームスの無惨な死体。  
作業をしていた捕虜達の死体が転がっている。  
吹き飛ばされた瓦礫の下敷きになって倒れているヤン。頭から血を流している。息はある。  
ヤン、うめいている。

ヤン「さ・・き・・咲」

動けないヤン。

○同・岡田のいる場所

松吉の遺体を抱えてへたり込んでいる岡田。  
ふとうめき声が聞こえる。  
瓦礫の下からそれは聞こえる。  
岡田ははっとしたように瓦礫をかきわける。  
バステンが血だらけになり苦しそうにうめいている。

岡田「バステン！」

瓦礫を必死でのける岡田。

バステン「(オランダ語) お母さん」

岡田、泣きながらバステンの下半身につけている瓦礫を必死でよける。  
バステンを瓦礫からズリだそうとする岡田。

岡田「今助けてやるから！、しっかりしろ！」

両足がちぎれているバステン。  
飛び散った足が転がっている。

バステン「(オランダ語) 痛い」

屈強なバステンが泣いている。  
岡田は必死でバステンを抱きかかえる。

岡田「バステン！」

バステンの意識が薄れて行く。

岡田「バステン！、頼む！、がんばってくれ！、いやだよ！、バステン！」

バステン、もうろうとした目で岡田を見る。

バステン「・・・トモダチ・・・ありがとう」

バステンの息が絶えた。

岡田「やめてくれよ！、バステン！、おい！」

バステンを揺り動かす岡田。  
バステンを抱き、大声で泣く岡田。

岡田「なんなんだよ一体これは！、どうなっちゃまったんだよ！、バステン、友達なんだ

る。戦争終わっても友達なんだから。何で死んでんだよ！」

泣き叫ぶ岡田。

○長崎三菱造船所

多くの建物が倒壊している。

咲が瓦礫の下からはい出てくる。

女学生達が無惨な姿で死んでいる。

咲「―」

○収容所・中庭

そこらじゅうに死体が転がっている。

生きているものが人が人や、遺体を運んでいる。

末永がぼろぼろの格好で元々悪い足を引きずり、原田の遺体を抱えて歩いている。

原田の遺体を地面に降ろす末永。

貝原、佐藤、ケビン、ジェームスの遺体。

末永、放心したようにへたり込む。

頭に血のにじんだ鉢巻きを巻いた桂がいる。桂も遺体を運んでいる。

グラハムとニールセンが重傷のヤンを運んでくる。

ニールセン「(オランダ語) ヤン、しっかりするんだ！」

血だらけのヤンの顔に水をかけるニールセン。

ヤンはうめいている。

桂「生き残った者はこれだけか」

桂、末永、ニールセン、グラハム、他2人の日本人(兵隊)と3人の捕虜がいる。そして重傷のヤン。

末永「・・・岡田は、死んだんか」

がっくりと肩を落としている末永。

岡田がバステンの遺体を抱え、足を引きずり歩いてくる。

末永「岡田！」

岡田がバステンの遺体を地面に降ろす。  
そして岡田、すぐに引き返そうとする。

末永「どこさいくんじゃ！」

岡田「・・・松吉が、まだなんです」

うつろな顔で歩く岡田。

岡田が足を向けた方はすでに火があがっている。

末永、岡田を引き留め、

末永「もう無理じゃ！、死んどるんじやろ！」

末永を振り払おうとする岡田。

末永「岡田！」

岡田、その場にへたり込む。

岡田は泣いている。

桂が岡田のところに来て、

桂「おまえは軍人だろ！、しっかりせんか！」

桂の怒声にはっとする岡田。

桂「ここは危険だ。みなひとかたまりになって、金毘羅山に待避する！、生き残った者は私についてくるように！」

桂、岡田を立ち上がらさず。皆が後に続く。

○長崎市街・咲の自宅

咲がぼろぼろの格好で走ってくる。  
家は完全に倒壊している。

咲「お父ちゃん、お母ちゃん！」

必死で両親を捜す咲。

瓦礫の下敷きになった父母の無惨な死体。

火災が咲の家にも及んでいる。

それを見た咲、呆然と座り込む。

○長崎市街・銭座川付近（夕）

川にはたくさんのお死体が浮かんでいる。

体中、焼け爛れた人々が幽霊のように歩いている。

子供が裸で泣きながら走っている。

地獄絵のような惨状。

銭座川の橋は崩れている。

歩いている桂、ヤンを担いだグラハムとニールセン、末永、岡田、他の生存者。

女の声「助けて下さい！」

崩れた家の瓦礫の中から声がするのを桂らが気付いた。

救助に走る桂。ニールセンとグラハムが負傷したヤンをそっと地面に寝かせ、桂の後に続く。

末永「おい！、体の動くものはこい！」

岡田も足を引きずりついて行く。

声の主の女（45）が助けられ、子供二人、老女が瓦礫から救助される。

が、声の主以外は無惨な死体であった

家族の死体を見て、女が半狂乱になって泣き叫ぶ。

皆、沈痛な思いでそれを見ている。

岡田、やりきれない。

○金毘羅山

多くの人が避難してきている。

疲れ切って座り込んでいる岡田。

末永が岡田の横に座る。

末永「大丈夫か」

岡田「・・・末永さんも」

末永「俺は大丈夫だ。けっこうしぶとくか」

無理におどけたように言う末永。

岡田は呆然と、燃え上がる長崎の街を見ている。

岡田「・・・何が、起こったんだ」

末永「アメリカがどでかい爆弾を落としたんじや」

桂がいる。

桂「今からすぐふもとの憲兵所まで食料の調達に行く。誰か、行けるものはいるか」

みなへたり込んでいる。

末永が立ち上がり、

末永「私が行きます」

岡田も立ち上がる。

末永「お前はいい。病体やし、そのけがじや。やすんどれ」

桂が岡田をみてうなずいた。

岡田「・・・」

ふらふらと座る岡田。

その時、ニールセンが叫ぶ。

ニールセン「(オランダ語) ヤン！しっかりしろ！」

ニールセンがヤンの体を揺り動かす。

ヤンは口からアワをふいている。

桂と末永がヤンに駆け寄る。

岡田立ち上がり、ヤンのところに行こうとするがふとぼろぼろの格好の女に目を見る。  
咲である。

咲、岡田に駆け寄り、

咲「ヤンは？、ヤンはどこ？」

岡田、ヤンの方を見る。

咲、桂や末永を押しつけてヤンの傍らに行く。

咲、アワをふいて苦しんでいるヤンを抱きかかえる。

咲「ヤン！」

ヤンがかすかに目を開ける。

咲「ヤン、ヤン！」

ヤンのアワを手でぬぐう咲。

ヤン「咲・・・咲」

ヤンのぼろぼろの上着に縫いつけられたお守り。

咲は十字架のネックレスを握りしめている。

咲「約束したでしょ！、ヤン、約束したでしょ！」

十字架を握りしめ叫ぶ咲。

ヤン「咲・・・愛してま・・・」

ヤンが血を吐く。

ことされるヤン。

咲「いやー！」  
ニールセン「(オランダ語) 神よ」

ヤンを抱きかかえるニールセン。  
グラハムが悲痛な顔でそれを見ている。  
咲は一瞬放心したような顔になり、キッ、と岡田の顔を睨む。

咲「どうしてよ。軍人さんやろ。なんで？、なんでみんな死なせるんよ！」

岡田が悲痛な顔で咲を見ている。  
はるか上空にB29の飛行音が響いている。  
咲が上空を見上げる。

咲「あんたら、なんで味方を殺すんよ！、敵は日本人でしょ！、私を殺しなさいよ！、  
なんでヤンを殺したんよ！」

咲が叫び、そして狂ったように泣いた。  
桂、末永が沈痛な顔をしている。  
岡田は生氣のない顔で燃えている長崎の街をみる。  
黒いすすが山まで飛んできている。

岡田「・・・何もかも・・・燃える」

咲の泣き声が響いている。

○2010年8月・長崎の街  
多くの車が行き交っている街中。  
たくさんの人・人。

○平和記念公園  
平和記念像。  
たくさんの人。  
修学旅行の高校生。

女子高生1「なんか、肩とか重くない？」

女子高生2 「えー、怖いこと言わないでよ」

女子高生3 「やっぱいいじゃんそれ」

女子高生1 「私霊感強いから」

女子高生3 「てか、何万人も死んだんでしょ、原爆で」

女子高生2 「なんで落ちたの？、原爆って」

女子高生1 「知らない」

女子高生3 「昔の日本はバカだったからだって、先生が言ってたよ」

高台にホテルが見える。

○そのホテルの最上階のラウンジ・中

岡田、咲、グラハム、エマ、山村がいる。

窓際のテーブル席。

山村がグラハムに名刺を渡している。

三菱工業・長崎工場・渉外部・部長の肩書き。

山村「(英語) やつと、名刺を渡すことが出来ました」

グラハム「元社員です」

おどけてグラハムが日本語で言った。

山村「(英語) しかし本当によく来て下さいました。改めてお礼申し上げます」

山村とグラハム、握手する。

グラハム「(英語) ずっと日本に来たいという思いがありました。しかし、終戦から後、全く

当時の日本人、岡田さんなどのご消息がわかりませんでした。やつと山村さんの尽力で、

日本にやってくる事が出来、私の方こそ感謝したい気持ちです」

岡田「(たどたどしい英語で) お元氣そうで、何よりです」

グラハム、岡田を見て微笑する。

そして、窓の外を見る。

グラハム「(英語) 長崎、変わりましたね。でも海と山、それは何も変わっていない。

あの時のままで」

平和記念公園を見るグラハム。

山村「毎年平和式典には、たくさんの方が参加して、平和への誓いを新たにするんですよ」  
グラハム「(英語) 日本は、本当に平和になったのですね。(日本語で) 岡田さん、咲さん、一緒に平和式典、行きましょう」  
山村「それはすばらしい」

岡田がその言葉にはかみながら頭を下げる。

岡田「私は、式典には一度も出たことがないんです」

山村「・・・そうなんですか」

岡田「私など、式典に出る資格はありません」

山村「なんですか。岡田さんはあの原爆の被爆者ですよ」

山村が怪訝そうに言った。

グラハム「・・・」

岡田「私は、軍人でした。今の日本人にとって私は、悪い存在なのです」

その言葉に咲が目をふせる。

グラハム「(英語) 岡田さんはなんと言っているんですか」

山村が岡田の言葉を英語に訳す。

その言葉聞き、じっと岡田を見つめるグラハム。

グラハム「(英語) 私は本国では、数少ない被爆者として、私の意志には関係なく、多少有名になりました。毎年、思い出したように、マスコミが私のところにやってきてある同じ質問をします。あなたは日本人に虐待はされましたか」と

咲が小声でグラハムの言葉を岡田のために訳している。

グラハム「(英語) そのたびに私は同じ答えを言います。今の基準で過去を推し量ってはいけません。自国の基準で他国を裁いてはいけません・・・岡田さん、あなたは手紙の中で私に謝っておられました。それはおかしいと思います。あなたが謝らなければな

らないのなら、私はあなたの何百倍も謝らなければなりません。なぜなら私は、原爆を落とした側の国の人間だったのですから」

グラハムの顔を見つめる岡田。

山村「・・・岡田さん、何故、あなたは平和式典に出なかったのですか。話せることがあったら、話して下さいませんか」

窓から平和記念公園を見る岡田。

岡田「・・・桂所長・・・捕虜収容所の桂所長は戦争が終わり、貴殿ら捕虜の方を本国に送り届ける事務の処理をした後、崩れた収容所の本部室で、一人ピストルで自殺なされました」

○ぼろぼろの収容所本部室

桂がガラスのない窓から海を見ている。こめかみにあてたピストル。

桂「・・・」

銃声。

○ホテルのラウンジ・中

岡田、咲、グラハム、山村。グラハムは目を閉じている。

岡田「私の上司だった末永さんは戦後、捕虜虐待と南京での中国人への虐殺の罪で」

○拘置所

牢屋が並ぶ廊下。

後ろ手に手錠をかけられ、ヒモでひかれながらアメリカ兵に連行される末永。

末永「俺は虐殺も虐待もしとらん！、おまえらが落とした原爆の被爆者じゃ。なんして俺が！」

○ホテルのラウンジ・中

岡田、咲、グラハム、山村。

岡田「……B級戦犯として、処刑されました」

○刑場

目隠しをされ、絞首刑にされる末永。

○ホテルのラウンジ・中

岡田、咲、グラハム、山村。

グラハムが痛ましい顔で首を左右に振っている。

岡田「……戦後私は氣力を失って、故郷に帰ることもせず、なすこともないまま、長崎の街にとどまっておりました」

○ぼろぼろの浦上天主堂付近

停まっている占領軍のジープ。

アメリカ兵達が写真などを撮っている。

ボロボロの聖母マリア像が無造作に転がっている。

呆然と壊れたマリア像を見ている岡田。

咲、岡田の前に現われる。

咲「……」

岡田を見つめる咲。

○ホテルのラウンジ・中

岡田、咲、グラハム、山村。

岡田「……私は、この長崎で小さな金物屋をはじめました。妻は、長く中等学校の英語教師をしておりました……子供は、出来ませんでした。私は、戦後の長い年月を、息を潜めるように生きて参りました」

ラウンジ内で食事をしている家族、若いカップル等の無邪気な笑顔。

岡田「・・・戦後私はあの収容所での出来事を一度も誰かに話したことはありません。きっと誰も、理解出来ないと思うたからです・・・原爆は、一瞬にして私を、それまでとは違う全く別の世界へと連れて行ったのだと今も感じています。あの捕虜収容所という場所でそれでも私が懸命に手にした絆もすべて、吹っ飛ばした」

間。

岡田「私には、あの戦争について何が正しく、何が間違っていたのかは、やっぱり今でもわかりません。ただただ、私の大切な人たちが、人間が落とした原爆と敗戦によって死んでしまったことが、今も哀しいのです。バステン、松吉、末永さん、桂所長・・・」

感極まり涙をハンカチでぬぐう岡田。

沈黙。

グラハム「・・・咲さん、私、覚えてます。原爆が落ちたあの日の、あなたの事」

○フラッシュ・金毘羅山での咲

咲「いやー！」

○ホテルのラウンジ・中

岡田、咲、グラハム、山村。

咲「私は、何も・・・すべて、忘れてしまったとです」

咲、窓の外に視線を変える。

グラハム「・・・(英語) ニールセンは28年前、原爆症からくると思われるガンでなくなりました」

絶句する岡田と咲。

グラハムが持っていたカバンを開ける。

そして、ぼろぼろの収容所服をテーブルの上に出す。

胸に護国神社のお守りが縫いつけられている。

咲が思わず口に手をあて驚く。

グラハム「(英語) これをニールセンから、いつか咲さんに渡してくれと頼まれている……やっと約束を果たせた」

咲がヤンの収容所服を手にする。

咲「……」

ぼろぼろと、ただぼろぼろと涙を流す咲。

咲の首の十字架のネックレスが震えている。

もらい泣きしている山村とエマ。

山村「(英語) 収容所で亡くなった方の墓標を作ろうと思っています。ご協力、して頂きますか」

グラハム「(英語) それはすばらしい……すばらしい」

岡田がポケットから石のようなものを出す。

それは聖母マリア像のかけら。

岡田「破壊された聖母マリア像のがれきです。これをせめて……使ってください」

どす黒くただれた瓦礫のマリア像。

皆そのがれきを見つめている。

グラハム、エマ、山村、咲、そして岡田。

窓の外。

美しい長崎の海と街。

平和な、その風景。

さだまさしの「ニッポニア・ニッポン」の曲が流れる。

終わり

\*この物語は基本的にフィクションですが、

長崎第14捕虜収容所での出来事は実在した日本人の述懐を元にしたものです。

# 瓦礫の聖母

2014年3月16日 発行

著者 小林正資

発行者 李鳳龍(オオハラ.李.ヒデハル)

発行所 描楽書蔵  
郵便番号 135-0016  
東京都江東区東陽1-28-13-401  
お問い合わせ [oohara.lee@ka-kuzo.jp](mailto:oohara.lee@ka-kuzo.jp)  
サイト <http://www.ka-kuzo.jp>

本作品のコピー、印刷、スキャン、デジタル化等の無断複製は著作権法上での例外を除き禁じられています。  
本作品を代行業者等に依頼してコピー、印刷、スキャン、デジタル化する事はたとえ個人や家庭内の利用でも著作権法違反です。